小説 舞麗辞
挿絵 2号
せんごくせんき
戦国閃姫
淫華咲き乱れしお女
二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

登場人物紹介

Characters

十六夜（いざよい） 刹那（せつな）

魔王を倒し、天下泰平の世の実現を実現すべく闘う二刀流の姫将軍。三種の神器の一つ、“烈光の勾玉”を胎内に宿す。

法龍院（ほうりゅういん） 聖（ひじり）

寺社仏閣に絶大な影響力を持つ武家の娘で、刹那と同じく魔王打倒を目指す巫女武者。“鬼人の剣”を身体に宿す。

御鏡 禍虞夜（みかがみ かぐや）

十五年前に反乱を起こし陽の国を支配した、魔王の名で恐れられる女将軍。“魂呼ばいの鏡”を右眼に宿す。

羅紗（らしゃ）

禍虞夜に征服された南方部族の出身者で、現在は禍虞夜の片腕と呼ばれる女武将。禍虞夜の寵愛を受けている。

第一章　月下の魔王、暁の姫将　007
第二章　巫女の進軍、白虎の乱　079
第三章　魔王再臨、揃いし神器　137
第四章　闇夜の淫獄、夜明けの刃　192

『第一章　月下の魔王、暁の姫将』より

瞬間、キッとその黒い瞳を禍虞夜に向ける。相変わらず不敵な笑みだ。しかしそれも間もなく潰える、潰してみせる。

「神器よ――我らが前の闇を打ち払えェェッ!!」

バシュッッ!!

刹那の叫びと共にその両の瞳から白光が瞬いた。光は一瞬にして天守閣を白く塗り潰し、刹那もろとも禍虞夜は満ち溢れる閃光へと呑み込まれる。

「なっ!?」

流石の魔王も光の中で呻くしかない。光はほんの数拍の後完全に消え失せ、先ほどと変わらぬ光景が姫将の視界へと還ってきた。

「どうだ、禍虞夜――身動き一つ、取れないだろう」

その身に仄(ほの)かな光を纏った姫将が問いかける。魔王は光を浴びる寸前に取った姿勢のそのまま、石にでもされたように身動き一つ取れなくなっていた。

「じ、じんぎ――〝烈光の勾玉〟か……しかしなぜ、お主ごとき小娘がそれを――!?」

赤毛の魔王は強張った表情で、必死に言葉を紡ぐ。

「なぜ――だと？　私の顔に見覚えがないというのか？　我が亡き母と生き写しといわれるこの顔に」

言いながら踵を上げ、長身の禍虞夜にその顔を突きつける。その言葉を測りかねるように鋭い視線を浴びていた隻眼の暴君であったが、不意にその瞳を見開く。

「そうか貴様――十五年前、戦火の中行方知れずとなったあの赤子か――姫将軍・命の娘、雪姫(ゆきひめ)かッ!?」
ようやく自分の正体に思い当たった仇の言葉に、刹那はゆっくりと頷く。
「左様――私の幼名は雪菜(ゆきな)。火具土の変の際貴様によって滅ぼされた、草壁家最後の生き残りだ!!」
家臣の中でもごく一部の者しか知らぬ彼女の正体。積年の思いを吐露するように、刹那は名乗りを上げる。
「おのれ――十五年前舞姫ヶ原で家臣と共に入水し果てたと聞いておったが――よもや生き永らえ、十六夜家に身を寄せていようとは」
魔王の相貌に、驚嘆と悔恨が入り混じる。
「貴様は知るまいが、十六夜の一族は草壁家にとって最古参の忠臣。しかし母は貴様のような不埒者の台頭を予期し、その目を欺くべくあえて十六夜を重用しなかったのだ」
その甲斐あって、倒幕後さしたる動きも見せない十六夜家はそれほど重要視されなかった。おかげで陽の国全土に及んだ神器捜索の際も、刹那は見逃されてきたのである。
「なるほど――そして落ち延びたお主は十六夜家の嫡子を装い、長年わらわを謀(たばか)ってきたというわけか」
全てを悟った御鏡の将は隻眼を閉じ、深く頷く。
「しかしなるほど、あの者の娘ならば――神器を有していても不思議ではない……くっ、

この段になって草壁の亡霊に後ろ髪を捕らわれるとは――」
悔しげに歯噛みする怨敵を睨みつけながら、姫将は刀を構える。
「これで陽の国にも天下泰平の世が訪れる――覚悟してもらうぞ、禍虞夜」
首元へ刃を突きつけられた魔王はしかし、その口端を笑みの形に歪めた。
「フン、好きにするがよい――だがな、刹那よ。わらわの首を獲ったところでお主の語る泰平の世などそこにはないぞ。必ず、お主に謀反を起こす者が現れよう。武士とは争うことによってのみ、その真価を発揮できる存在ゆえにな」
「戦のための刀だけじゃない、民を護るための刀だってある!!」
思わず反論が口をついて出る。少女にとっての戦はあくまで、民を護るための必要悪であった。
「ふふ、やはり親子か。命と同じようなことを言いよる。しかしその守りに入った姿勢こそ、反吐が出るというのだ。戦に背を向けた武士など生きるに値せず」
吐き捨てるように言葉を紡ぐ仇を前に、刹那の剣先が怒りに震える。
「だから、母上を――」
「クク……ぬるま湯に浸かり錆びついた太刀など、わらわの敵でなかったわ！　唯一――この目を奪った一太刀を除けばな」
魔王の左眼が隣の眼帯を睨む。眼帯の奥、右の瞼と頬には一条の刀傷が今もありありと浮かんでいた。

「窮鼠猫を噛むといったところか――おかげで赤子であったお主と、そして今思えばそのうちに宿る神器をも取り逃がしてしまったわ――」
ギリッ……語りだしているうちに十五年前の怒りが再燃したか、禍虞夜が激しく歯噛みする。
「戦を捨てた武士、鼠にも劣る豚の分際でわらわの美貌に傷をつけおって……今思い出しても忌々しい!!」
亡き母を愚弄する暴言を浴びて、刹那の血が瞬時に沸点へと達する。
「なんだとこの下郎！　己が民さえ幸福にできぬ、貴様こそ武士の恥さらしだ！　何が美貌だ――豚にも劣る、その醜い顔を見せてみろッ!!」
怒れる姫将は一旦喉に当てた刃を退けると、暴君の右眼を覆う眼帯へと手を伸ばした。そして勢いに任せ、それを力いっぱい引きちぎる。
「なっなにをする…やめろぉっ!?」
醜悪な眼窩を覗かれる屈辱からか、禍虞夜が叫ぶ。だが刹那はそれを完全に無視して、眼帯を引き剥がした。いい気味だ――そんな昏(くら)い感情が、少女を突き動かしていた。
しかしその先にあったものは潰れた眼球でもがらんどうの眼窩でもなかった。
眼帯の内側ではなんの変哲もない瞳がこちらを覗いていた。唯一左眼と異なるのはその瞳孔が闇色ではなく白銀で、ちょうど晴天の下の水面のように外界を映していたことくらいか。いずれにせよ――魔王の右眼は、潰れてなどいなかったのだ。

そしてその時。当の禍虞夜の顔からは怯えや怒りの形相は洗い流した墨のようにすっかりと消え失せていた。あるのは顔面いっぱいに満ち溢れた邪悪な笑み。

「あ――か、鏡……？」

そう、魔笑を見せる禍虞夜の右眼はまさに鏡であった。そこに映り込む己自身を前に、赤い鎧の少女武将が小さな悲鳴を上げる。

ぶっしゅぅわあああああああぁぁぁ――――っっっ!!

瞬間、水面を打ったように鏡が泡立ち、かき消された鏡像の中から赤紫の肉が弾けるように飛び出した。

ビチビチビチイィィッッッ!!

「うぐっ!?　はっはなせこのぉっ!!」

肉は幾多にも分かたれて綱のように細長く伸び、鏡を覗き込む姿勢のまま赤鎧の少女武将を一気に捕縛してしまう。ぎし、ぎし……腐肉に絞られ鎧が軋んだ。

「あっはっは！　飛んで火にいるなんとやらじゃ!!　自ら我が魔眼を覗くとはなぁ!!」

捕らえた姫将を大いにせせら笑う禍虞夜。刹那の精神統一が乱れたことで神通力が弱まったか。少女とは反対に、魔王は既に神の眼光から解放されていた。

「これぞ〝魂呼ばいの鏡〟。黄泉平坂（よもつひらさか）へ続く門を開き彼岸（ひがん）の住人を呼び寄せる、我が瞳に宿りし神器よ!!」

魔王の名に違（たが）わぬ魔性の術を誇らしげに披露する声を聞きながら、冥界からの使者に捕

らわれた刹那は罠にかかった狼のように激しく身悶える。
「くうっ、神器……その眼に隠していたのか……!!」
禍虞夜が鏡を所持している以上、その神通力を用いた反撃には警戒しなくてはいけなかったのに。挑発に乗って余計なことをしなければ、その首を獲れていたはずなのに――!!
しかしいくら悔いてももう遅い。四肢を捕らえる肉綱は乙女の力では頑として動かない。しかも神器の光は一度放つと、相当時間を置かねば発揮できなかった。つまり刹那自らに、この窮地を脱する手立てはもう残ってはいないのである。
とはいえ、それはあくまで自らの力に限った話だ。
「……しかし私には、三千の勇敢な兵がいる――間もなく彼らがこぞってここに押し寄せるだろう……禍虞夜、どの道お前はもうお終いだ」
よしんば自分がここで倒れても、彼らがきっと――強気の態度を見せる捕虜武将に対し、しかし魔王の二つ名を持つ女もまた、怯む様子はない。それどころか、瞳を三日月の形に歪め邪悪な笑みで顔面を染め上げる。
「ククク……可愛いのぉ、刹那や。お主、この期に及んで本当に己の実力でこのわらわがおる天守閣まで攻め込めたと、そう信じているのかえ？」
少しずつ身体の自由を取り戻しつつある敵将は、ゆらゆらと炎のように揺らめきながら魔触手によって捕らえた少女に問いかける。
「な……ど、どういう意味だそれは……!?」

相手の言葉の意を測りかねた刹那が問い返す。しかし禍虞夜が口を開くより早く。
「御館様、失礼いたします」
ガラリ。唐突に襖が開き、一人の武士が部屋へと足を踏み入れた。
それは少女だった。元服を迎えたばかりの刹那から見てもまだ、幼く見える。身長はせいぜい彼女の顎くらいか。腰に届くほどに長い銀髪は目を見張るほど美しいが、ざっくばらんに切られたそれはまるで野生のハリネズミみたいだ。
顔立ちもまた童顔で、つぶらな瞳と愛らしい小鼻は無垢な童女を連想させる。だがその表情にはしっかりと、幾度もの死線をかいくぐってきた武士の風格が刻み込まれていた。
「羅紗か――誰も入るなと言っておいたはずだが？」
責めるような言葉にしかし、銀髪の少女は臆する様子もない。
「羅紗――こっ、この子が陽の国にその名を轟かすあの〝麗燦京の白虎〟だと？」
思わず姫将が声を上げる。銀髪少女の名は、その二つ名と共に刹那も聞き及んでいた。御鏡に征服され、陽の国へと併合された南方部族の出身者。それでありながら今はその数少ない末裔と共に都へと仕え、魔王の片腕と呼ばれる女武将だ。その武勇伝は数知れない。
（しかし――まさかこんな子供だったなんて――）
羅紗の駆け抜けた戦場には、その獰猛な牙の前に敵兵の亡骸はおろか草木さえ粉塵と消えゆく。そんな噂に獣人じみた巨兵を想像していた刹那は、余りの違いに驚くばかりだ。
だが、羅紗と呼ばれた少女が放つ一言は、そんな瑣末な事柄など忘却させ、姫将を一気

に青褪めさせることとなった。
「階下に入り込んだ十六夜の軍勢、残さず排除が完了しましたのでご報告をと」
淡々とした口調で紡がれる言葉に、刹那は思わず目を見開く。
「う、嘘だッ!!　城内へと討ち入った我が軍は少なく見積もっても二千五百！　それが全滅だなんて――」
「だから申したであろう？　主らは実力でここに至ったわけではない。あえてわらわが呼び寄せたのじゃ――その体内に宿る神器のためにな」
ぶるぶると震える虜囚を前に、いよいよ禍虞夜はその邪悪さを表情に曝(さら)け出す。
「法龍院の餓鬼巫女目当てに送った偵察から、既にお主が神器を宿しておることは聞き及んでおる――もっとも、お主があの命の娘とまでは知らなんだが、な」
ようやく自分が罠に嵌まったことを悟り、刹那の顔が凍りつく。
「ともあれ。お主はまんまと単身わらわの下へとやってきた――お目当ての神器と共にな。ならば残る兵士らは？　……ククク、もう用はないわなぁ？」
今や完全に身体の自由を取り戻した魔王は、芝居がかった口調で少女武将を嘲笑する。
（みんな……みんな、殺された……!!）
「きっ……貴様ァァァ――ッッ!?」
ギッギィィッ!!　怒りに震える刹那がその身をわななかせるも、鏡から呼び出された肉綱の魔物どもは強靭な筋肉のようにしっかりと女体を縛り続けた。

そればかりか、暴れれば暴れるほど肩当てや胸当ての隙間から覗く和服部位に激しく食い込み、武将とはいえ年齢相応の柔らかな女肉がぎゅうぎゅうと搾り出されてしまう。
「フハハ、いい顔だぞ十六夜刹那！　十五年前この天守閣へと攻め入った時、お主の母が見せたのとよう似ておるわ！」
にゅるりっ……肢体を縛りつける肉が動き出した。ギチギチと締め上げる力はそのままに、粘液を利用して服の上から少女の肉体を舐めるように滑りゆく。
「くっ……なにをするっ……んうっ」
疑問の言葉を漏らした刹那も、肉綱がぐにゅりと乳房を絞り上げ股座（またぐら）を潜り抜けるのを感じてその意を察する。
「捕らえた者を辱めようとは――どこまでも下種（げす）なヤツッ!!」
ずぬるうぅぅっ。怒りに震える間にも、前合わせから肉触手の先端が乳谷間へと潜り込んできた。ただでさえ年齢不相応なほどに実った乳房は胸当てに圧迫されより強調されて今にもはち切れそうだ。
ぬにゅりゅうぅっ……そんな肉の狭間へと侵犯する腐肉は生温かく、その見た目も相まって服中に動物の臓物でも押し込まれたかのようにおぞましい。
すりすり……下半身では、股間を潜る肉が下穿きの上から秘所を摩擦し始める。思わず股をきつく閉じるも、結果として触手をきつく締めつける格好となってしまう。おかげで敏感な内股部分でもって、よりその不気味な感触を味わう羽目となった。

「うっ……っ……っふくぅ？」

まるで内股を牛や馬に舐め回されているかのようだ。肉粘膜に素肌をにゅるにゅるとまさぐられ続けると、身体の中を通っていた芯を抜かれたみたいに脱力してしまう。

布越しの股間にもじっとりと魔物の体液が染み入ってくる。厠でしか用をなさない乙女の部位にも、執拗に執拗に摩擦を受けるうちにチリチリと火に炙られるような疼痛が生まれてきた。

（なっ、なんだこの感じ……？）

下腹部から湧き上がってくる感覚は肉を嬲る化け物の不快さとは対照的にひどく甘やかなものだった。化け物の嬲りに嫌悪以外の感情を抱いている自分に気づき、戸惑う刹那。

（どうしたんだ私の身体……なにか、なにか変だ）

柔らかな肉を捏ね回されるたびに四肢へとどうしようもないくらいのもどかしさが迸る。

確かに気持ち悪いのだが、それはたとえば足裏をくすぐられた時のようなこそばゆさに近かった。

（くそっ、きっと禍虞夜が何かおかしな術で私を籠絡しようとでもしてるんだ――そうはさせるか！）

肉体を襲う感覚を拒絶するように、奥歯が砕けそうなほどまた強く歯を食いしばる。対する化け物は少女の戸惑いを見透かすように、乙女の肢体を巧みに責めだした。

ずりっずりっずりぃぃぃ……。

「うっ…こんなものぉっ……んんぅっ」
股間にあてがわれる魔肉はその肌に滑り光る腐液をまぶすように、摩擦にも似た前後運動を繰り返す。
（なにっ…なんか股の、奥の方が…むずむずしててっ……あ、熱…い……）
熱はじわりと股座に広がり、膣口の辺りでじゅくりと滲む。股擦りを仕掛ける化け肉の感触が艶かしさを増し、自分が股間を濡らしていることに気づかされる。
「んぁっ⁉　……く…ううっ」
（しっ失態だっ‼　こんな、はしたない姿を――‼）
魔物相手に濡れてしまった屈辱に打ち震えるも、既に刹那は自力で立っていることさえままならない。
尻が鉛になったように重い。腰に綱を巻かれ、強力に引っ張られてでもいるようであった。
「うう……くぅうっ」
散々堪えていたものの、とうとう刹那は膝から崩れ落ち、その重い尻をぺたんと床に落としてしまう。しかしそれが更なる淫辱の引き金となった。
「っきゃあっ⁉」
ぎゅむうっっ！
尻を落とした瞬間、床板と股間に挟み込まれた肉触手が肉筋に勢いよくめり込んだのだ。

柔らかな割れ目を無理やりこじ開けられて、堪らず姫将は風船が割れたような悲鳴を上げる。慌てて口を紡ぐももう遅い。

「くはは、地声は随分と可愛らしいではないか。さしずめ、普段は男勝りを気取っておるのであろう？」

仁王立ちで虜囚を見下す仇は、少女に垣間見えたはしたない女の本性をここぞとばかりにあげつらう。

「くうぅぅっっっ……!!」

嘲弄されて、眉間に皺を寄せ赤毛の仇を睨みつける。魔王の言葉はある面で真実ではあった。幼い時から強くあることを宿命付けられてきた少女武将は、常に雄々しくあろうと自らを律してきた。だがやはりその実は妙齢の娘、猛々しい武士の姿も兵を率いる将として演じているに過ぎなかった。

「だがな、いくら男の真似事をしてみせたとて主は女。自分が一介の牝（メス）に過ぎぬということを、わらわがたっぷりと教え込んでやろうぞ」

禍虞夜の意志と連動しているのか、彼女の言葉をなぞるようにして触手は更に激しく蠢く。

にゅむっにゅるっ…むぎゅいぃぃっっっ……!!

胸元から侵入した肉綱は両の乳房にとぐろを巻き、藁でも縛るかの如く凶悪な搾乳を施してくる。

『第二章　巫女の進軍、白虎の乱』より

「卑屈な不意打ち程度、お見通しですッ！」
ガキイッッ!!　背面へと繰り出した薙刀が羅紗の鉄爪を食い止める。正面から前のめりに力を預ける白虎と比べ、聖の体勢はひどく不安定だ。にもかかわらず、
ブウウゥゥゥンッッッ!!
「うわあああっっ」
弾き返されたのは羅紗の方であった。鬼人の怪力をまともに浴びた麗燦京の白虎は、暴発した花火のように吹き飛ぶ。遥か向こうの大木へとしたたか叩きつけられて、その幹に半身を沈め、ようやっと停止した。
「神の御前にあっては正義に勝る道理はありません」
声高に宣言する巫女武者は、地に着けた足を一寸たりとも動かしてはいない。
「んぐぅっ、鬼人の剣……なるほど恐るべき力だね」
並の人間であれば背骨を砕かれ喋ることすらままならないであろう。しかし部族の娘はしばし苦痛と驚きのない交ぜとなった表情を浮かべていたものの、すぐに満面の笑顔でもってそれを塗り潰した。
「羅紗、どうしてもそれが欲しくなっちゃった」
ニッ。童顔の武将が両の口端を笑みの形に歪める。
「愚かな……力の差は見せて差し上げたはず。早くそこを退きなさい。さもなくば次は――斬ります！」

不敵な少女の振る舞いに身を硬くしつつ、それでも己の優位を信じる藍色髪の巫女は頑として言い放つ。
「ふふん、そんなに上手くいくかなぁ――？」
言いながら、羅紗が軽く手首を振るう。シュン、という金属音が小さく鳴り、その手甲から伸びた鉄爪が一気に引っ込んだ。
「……どういうおつもりです？」
獲物をしまいながら、しかしその言葉は明らかに反抗の意志を消していない。二律背反――少女の意図を測りかね、聖はいぶかしむように問いかける。
「なあに、お前の馬鹿力相手に力押しは確かに不利。羅紗は無駄が大嫌いなのさ――お前にはこれだ」
ヒュウッ。
風切り音が大気を震わせる。羅紗が人差し指と親指の二指を咥え、指笛を鳴らしたのである。
「お仲間でも呼ぶおつもりですか？　ですがいくら人を集めようと神に祝福されたわたくしの敵では――」
ビリッ！
「んくっ⁉」
巫女武将の強気な言葉が不意に途切れる。乳房の先で唐突に、春雷のような刺激が爆ぜ

た。
思わず身を屈める聖。峻烈な刺激は一瞬であったが、乳先には今も恒常的な刺激が残留していた。
（胸の先を何かに触られ…いいえ、吸われてるっ？）
間違いない。刺激は明らかに吸引によるものであった。巫女乙女の乳首に、何かが吸いついているのだ。
慌てて後方へと飛び羅紗から距離を取る。そしてすぐさま和服の前合わせから、そっと胸元を覗き込んだ。
初雪のように白く柔らかな胸の先に、闇色の何かが張りついている。更によく目をこらせば、それは――。
「ひっ――蛭ッ!?」
その正体に気づき、声を裏返らせる。聖は虫の類が大の苦手であったのだ。
いったい、いつの間に――巫女少女の問いより先に、麗燦京の白虎が答えた。
「この森は羅紗たち一族の庭。お前はここまで上手く抜けてきたつもりだったろうけど――ちゃあんと仕込みは完了してたってワケ」
どうやら彼女は、自分のことをこの森に入った時から監視していたらしい。先ほどから感じていた疼痛の原因はこれだったのだ。
チクッ。反対側の乳突起にも鋭い刺激が弾けた。蛭は狙いすましたように乳首の先端へ

と噛みついてくる。

「それは南方の沼地に生息するメクルワセという蛭よ。人間の粘膜から血を吸う習性があってね、女狂わせの名の通り羅紗の部族では女の咎人を折檻するために使われてきた虫なの――ふふ、気持ちいいでしょ？」

巫女武将の心を見透かすように、銀髪の少女がいやらしく笑う。

「きっ、気持ちいいなんて、そんなふしだらなことありませんっ!!」

頬を朱に染め眉を逆立て反論する聖。嘘ではない。吸血のせいで乳先が少し痛痒いが、ただそれだけだ。

（で、ですけどこれっ……どんどん、痒みが増してきてる……）

しかしこの痒みが曲者（くせもの）であった。誤って漆（うるし）に触れてしまった時のように、噛まれた粘膜がむずむずと疼いて止まらない。刺激を浴びた乳首はトクトクと脈打って膨れだし、敏感な末端神経がチリチリと焦げつくように熱を持つ。掻き毟りたい衝動に駆られるも、肝心の患部は虫に覆われ触れることもできない。

（とにかくっ、とにかく蛭をどうにかしなくては）

張り詰める乳首からどうにか引き剥がそうと、気持ち悪いのを我慢して胸元へと手を差し入れる。しかし蛭は粘液に濡れている上グニョグニョとしていて掴みどころがない。ようやく掴んだと思っても魔虫は肌にしっかりと癒着しており、とても取れそうになかった。

「無駄むだ。メクルワセは一度食事を始めたら満腹になるまで絶対に離れないよ。その間

に餌にされた女は何度も何度もイカされちゃうってワケ」
取ろうとすればするほど、蛭はより粘膜に食いついて離れない。疼痛は劇的に倍化し、乳首の先で火が点されているかのように狂おしく辛い。強まる刺激に、聖は焦りを増すばかりだ。
「んくぅっ…こ、こんなものにわたくしがっ屈するだなんて思っていたら……はぁあっ⁉」
ぺたんっ。敵に対する反論の最中、巫女武者はあられもない恥声を上げつつ地面へとへたり込んでしまう。
袴の内側、足の付け根に新たな刺激が生まれたのだ。袴の股間を押さえ込む巫女を見て、銀髪少女が邪悪な笑みに拍車をかける。
「ふふふ……アソコにも、蛭が食いついちゃったみたいね♥　――うは、しかもサネの辺りを噛まれちゃってるの？　あははっ、かわいそー♥」
袴の内側では下穿き越しに、恥丘部分がぷっくりと膨れ上がっていた。そんな巫女の秘所を覗き込みながら、口元を押さえて羅紗が屈託のない笑い声を上げる。銀髪少女の言葉通り股間の蛭はちょうどサネ、つまり陰核を咥え込むように処女巫女の陰部へと張りついていた。
「はぁっ…そんなところ噛まないでっ……んはぁっ」
聖職者たる聖は無論、風呂と厠以外で触れたことなどない部位だ。そこを突然気味の悪

い虫に啄まれ、激しく啜られて、聖は完全に腰が抜けてしまう。
「卑怯者ぉっ…武士なら正々堂々と勝負なさい!!」
なんとか立ち上がろうと片膝を立てるも、それ以上脚に力が入らない。中途半端な姿勢のまま非難の声を浴びせる聖に、しかし羅紗は悪びれる素振りも見せない。
「あはは、笑わせないでよね――戦とは所詮、命の奪いあい。仕組まれるお前が馬鹿なだけでしょ？」
嘲笑する少女の瞳はしかし笑っていない。その冷ややかな眼光を浴びて、巫女武者は自らの子供じみた口撃を却って恥じてしまうほどであった。
（確かに全てはわたくしの不覚。ならば――）
「ならばこの状況を打破するのもわたくし次第……わたくしはっ、負けませんからっ！」
虫による淫らな刺激に堪えながら、時折息を呑みつつ健気に宣言する聖。しかし蛭どもはそんな彼女をせせら笑うように、執拗な吸血を繰り返す。
ちゅうっちゅうぅっ……。
胸と股間、そして気づけば身体の至るところで。淫虫が乙女の甘い血潮を啜る音が聞こえてきた。
「言い忘れてたけど、メクルワセは血を吸う時獲物の身体に毒を流し込むの。最初は痒いだけなんだけど、それがヒトにはとびきり極上の媚薬で――うふふ、言ってるそばから――ね」

羅紗が童顔に似つかわしくないほど禍々しく笑う。だが聖はそんな少女の表情も見れない、顔を上げることができない。

「あっ、あそこっ、があ…あぁぁんうぅっ……!?」

陰核が熱い。吸い取られた血液を補充するように、肉豆がどくどくと充血してゆく。

我慢を重ねた疼痛は、聖本人も気づかない間にくすぐったさへと変わっていた。いや、くすぐったいのとは少し違う。腰骨がジクジクと泡を立てて溶けるような、あるいは腰から下を飴湯にでも漬けられたような甘ったるさ。それは処女巫女が今まで一度として味わったことのない、不可思議な感覚であった。

陰核の鋭い痛みも、ちゅうちゅうと吸いつかれるたび痛覚が薄れ、代わりに腹中でずしりと鈍い疼きが生まれ落ちた。あたかも腹の奥底で熱湯が、温泉のようにじわりと湧き上がっているかのようだ。

これが羅紗の言う、蛭の媚薬効果なのか。だとしたら、自分が今感じているのは肉の悦び――？

（こっこんなの嘘ですっ、わたくしは神に仕える身。邪淫の快楽などに屈するわけ…ないっ……）

湧き上がる快感を頭の中で必死に否定するも、肉は蕩けたみたいに甘く痺れきって言うことを聞かない。

ずちゅうっ。また蛭の吸いつく感触。しかも今度は――。

「ひぁっ、やだっそこ汚いっ汚いですっだめぇっ!?」
それまで以上に取り乱す聖。無理もない、淫虫が取りついたのは、桃割れの狭間に息づく菊座であった。
（いやぁっ、お尻からっ血を吸われてるぅぅっ……）
ヌルヌルとした蛭の感触は、まるで肛門に舌を這わされているかのようなおぞましさだ。耐え難い恥辱とずしりとした鈍い疼きが、桃孔にじわりと広がる。
乳先に肉芽、更に肛門と。立て続けに敏感粘膜を啄まれた巫女武将は肌を朱に染め、身体中に玉の汗を転がしていた。
「うぅっ…こ、こんなところで……屈するわけには」
なんとか蛭の悪戯をやめさせようと眼前の羅紗へと斬りかかろうと試みるも、そのたび折檻するように蛭が噛みつき、峻烈な刺激に手にした薙刀を取りこぼしてしまう。
淫らな刺激に抗う聖職者の姿をしばし楽しんでいた銀髪少女であったが、獲物の様子が変わったのを目ざとく見つけ口端を歪めた。
「あらあら聖――お前、もう腰振ってるの？」
「え……？」
言われて自分の下半身へと目を向け、唖然とした。気づかぬうちに腰が「の」の字を描くように時計回りに弧を描き、破廉恥な踊りを見せている。袴に浮かび上がった左右の膨らみは互いに打ちあい、その弾力を競いあうかのようにぷりぷりと小刻みに震えていた。

「いっいやぁっ、ちがうのっちがうんですこれぇっ……やっなんでっこしっ腰とまらな…ああああっっ!!」
下腹部の疼きを鎮めようと身じろぎしていただけのつもりだったのに。知らぬ間に晒していた余りにもはしたない姿を自覚して、恥辱で脳髄が沸騰しそうだ。
しかし自覚したことで、却って腰の疼きが爆発した。聖はかくかくと前後にせわしなく腰を振り乱し、子宮を揺さぶってその内側に満ちる淫悦を貪ってしまう。
「何が違うんだか……巫女だ神兵だとか言ってても所詮は男所帯。夜は部下の男を取っかえひっかえ楽しんでるんでしょ」
「そっ、そんなふしだらなことありませんっ！　わ、わたくしは神に操を捧げた身、男性などっ……」
淫悦に小さな悲鳴を混じらせながらの反論、それを耳にした銀髪少女の金色眼が丸くなる。
「へえ、じゃその歳で男も知らないのォ？　流石は箱入り娘ね――こんなおっきなお尻してるくせに!!」
バシィッ!!　羅紗の蹴りが聖のふりふりと揺れ動く巨桃を打つ。
「んひゃあぅっ!?」
下半身を襲う振動に肉の内側で燻る刺激が弾け、甲高い悲鳴が喉をつく。
「あははっ、いい声で鳴くじゃない！　感度もよさそう――それで男を知らないなんて勿

『第四章　闇夜の淫獄、夜明けの刃』より

あれほどいた男たちも既にその九割方が三匹の牝いずれかに濃密な精をぶちまけ終えていた。

「お尻寂しいですぅっ、どなたか挿れてぇっ……おっぱいでもシコシコさせて頂きますからぁっ♥」

「羅紗のおまんこ超きもちいいんだからぁっ♥　早く挿れてよぉっっ、ほら、もう一本くらいなら入るからッチンポ二本目挿れてっ、はやくうぅぅんっっ♥」

「んはぁぁっ…おくっ奥まで届いてるっ……あんっあっあああっ…だめっお尻それ以上はだめぇぇ……!!」

聖と羅紗が破廉恥極まる嬌声を上げ、それに少し遅れて刹那の艶かしい喘ぎが重なる。華よりもなお芳しい濃密な牝の淫臭は、数千の牡臭さえも塗り潰す。

いつしか男たちはそれが己の主君であるかどうかなど関係なく、とにかく空いた娘へと飛びかかり欲望にいきり立った肉を押しつけるようになっていた。

「んはぁっ…わたくしにもっとご奉仕させてっ、お尻の穴舌で綺麗にお掃除させてぇっ…おちんちんからタマタマまで、たっぷりおしゃぶりいたしますからぁぁっ♥」

嬌声を上げる藍色髪の巫女は頭から糊を被ったようにぐっしょりと白濁にまみれていた。もう何人目かわからない男の尻を清めながら、両手で左右の牡を扱き立て、小指では陰嚢をくにくにと弄り回している。

「ああっおまんこの中もすごい熱いぃっ…んふぅっお尻も突いてっもっと深いとこっそう

そこ好きィッ♥」

同時に巫女姫は乗馬のような腰振りで前後の穴に招いた牡をもてなしている。腰を使っているのは聖ばかり、屈強な兵士らはされるがままに牡汁を搾り取られるだけ搾り取られていた。

偶さか他の女が空いたのを見て、一人の男がすかさずそちらへと移ろうとするが、

「だめぇっ!!　貴方はわたくしのおちんちんなんだからぁ!!　わたくし以外の方に射精しちゃだめなの!!」

ぎゅうっ!!　男の行動を目ざとく見つけた巫女少女は男根を握り締め、力ずくで引き止める。

「ちゃんと順番に、皆さんにご奉仕いたしますからぁっんちゅっ…おちんちんの皮に溜め込んでらっしゃる汚い滓も、くさぁいお尻の穴もぉっ♥　みんなみんな、わたくしにとっておいてくれなくちゃだめなんですから……ね♥」

媚びるような甘え声からは、どの牡も逃がしたくないという浅ましい独占欲が透けて見える。その証左に聖は男の不浄を啜りつつ時折碧眼をきょろきょろと見回し、両指に余る男根が皆自分に欲情しているのを認めてはゾッとするほど淫猥な微笑を漏らすのだった。

「見て見てっ羅紗のまんこ」、キッキッでそいつらのなんかよりずぅぅっと気持ちいいよォ？　十六夜のヤツでも法龍院のヤツでも、早い者勝ちなんだからぁ♥」

くぱぁぁっ……自ら股を開き、幼貝を指で割り開く。褐色肌の少女もまた、堕落の一途

をたどっていた。桜の蕾よりも淡い薄紅の膣壁が剥き身となり、女蜜と白濁にてらてらと濡れ光る淫肉は、更なる精液を強請るが如くピクピクと卑猥に蠢いていた。
「そうか、てめえがあの麗燦京の白虎かよ…俺の故郷はてめえに焼かれたんだ。たっぷり礼をしてやるぜ」
ずくうぅぅっ!! 赤鎧の男はほっそりとした乙女の脚を捕まえ股を裂くように限界まで開かせると、そそり立つ肉棒をその直径の半分にも満たない膣口へと押しやりそのまま遠慮なく刺し貫く。
「ひんぅっ…んにゃぁっ、子宮潰れるぅぅぅッ♥」
陵辱というよりは暴行に近い挿入にも、肉欲の虜となった今の少女からは歓喜の悲鳴しか呼び起こさない。
「ケツも簡単に指呑み込んでくぜ……てめぇ禍虞夜の夜伽だったんだってなァ。どうせ身体で地位貰ってたんだろ? この恥知らずの餓鬼淫売がよぉっ」
昨夜までなら言われただけで殺気立っていた侮辱の言葉さえ、恥悦という快感の薬味となって胸を焦がす。
「おら、ケツにぶち込んでやる……牝餓鬼め、このちっこいケツ穴、ぶっ壊してやるぞ……!!」
ずにゅっずぶぎゅにぃぃっっっ……灼熱の怒張が直腸を焼き、無遠慮に刺し貫かれる。逞しい牡を根元まで捻じ込まれて、ズクリと下腹が膨れ上がるも、

「きひぃぃっ、お腹の奥までチンポ届いてるよぉっ！　お腹ン中でチンポがぶつかってりゅのォっっ♥」

膣と直腸を隔てる薄い肉膜を両側から摩擦され、かくかくと腰を振りながら褐色肌の牝が鳴いた。

巫女姫と麗燦京の白虎は既に、陵辱により理性まで蕩かされていた。半歩踏みとどまっていた十六夜の夜叉姫も、肉体は既に堕淫の一途をたどっていた。

「ひゃめっお尻ぃぃっ!!　今だめっ…待って、今挿れられたらまたイっちゃ……あひぃぃぃっ!!」

白濁の涎を垂らす肛門にもう何本目かわからない男を食べさせられて、姫将が尻絶頂にわななく。

女陰以上に具合がよく、また彼女の乱れようも激しいと見るや、男たちはこぞって刹那の肛門を犯すようになっていた。

果てた男が抜いたそばから新たな男が突き込んでくるので直腸内部の牡精は溜まる一方。そのせいで普段なら鍛錬に引き締まっている彼女の下腹は、あたかも孕んだようにぽっこりと下品に膨れていた。

「なんてケツだ、チンポ食いちぎる気かよ……挿れたばかりだというのにもうっ……我慢が利かんっ!!」

びゅびゅっ、びゅるびゅくどぷぷぅぅっ!!

「ふぁぅ…んひっ、ひゃあぁ…もっ許し…てぇぇ!!」
鳴き叫びながらも腸壁を新鮮な子種に撃たれると腸管が熱く痺れ、激しい極みに上らされてしまう。
既に百人以上の子種を呑まされた直腸はぱんぱんに膨れ、腹の中では牡汁がたぷたぷとたゆたう。
「ケツで果てるとこちらもぎゅうぎゅう締めつけてくるぞ…ほれこっちにも、たっぷりと射精(だ)してやる!!」
ぶしゅっびゅぷびゅぷびゅびゅぴゅ――――っっ!!
「んひゃぅっまた胎内(なか)でぇ…ああ、イクゥッ…お尻イッてる最中なのにまたぁ、腰砕けちゃうぅっっ!!」
子宮で爆ぜる劇悦に臍から下が吹き飛んだのではないかと錯覚するほどの衝撃が牝腰を揺るがす。指先に力が入らない。身体中の肉は幾度も極めた快感の凄まじさで、ドロドロに蕩けてしまったかのようだ。
今の刹那を突き動かしているのは、孕みたがって疼き狂う子宮の脈動だけ。思い浮かぶのは熱くて硬い男根と、それが吐き出す粘つく子種のことだけだ。
いつしか三匹の牝は、互いの吐息がかかるほど寄り添いながらまぐわうようになっていた。
「刹那殿ォッ…すごいっそんなに殿方のを浴びられて……わたくしにも分けてくださいっ

…ちゅぅっ♥」

すっかり牡精中毒となった発情巫女は男根が放つものだけに飽き足らず、頬を寄せる姫将の美貌を覆った白濁にまで舌を伸ばしそのまま唇までをも奪う。

「んあっ、そんな聖殿…女同士でこんにゃのっ…んぁっ…ちゅっ、くちゅっ…んぶぅぅんぐぅぅ…っ」

同性の接吻に戸惑いながら、柔らかな舌を絡まされると脳髄をかき回されるような心地よさが理性を奪い、犬巫女の唇をしゃぶって子種混じりの唾液を啜ってしまう。更にそれを羨んだ銀髪少女が割って入り、

「ふたりばっかずるいぃっ！　羅紗にもチンポ汁舐めさせてよぉっ……んちゅっ、ぺろれろぉぉっっ♥」

三枚の桃色舌が粘つく精液を奪いあい、互いに激しく啄みあってぬらぬらと淫らに躍った。

淫欲にふやけた少女武将らの脳髄は、敵味方どころか牡牝の区別さえ失って、ただ肉に肉を絡ませることだけに夢中になっていた。

「ククク、三人ともすっかり出来上がりおったな。どぉれそろそろ――とどめを刺してやろうか」

空の暴君がそう呟くや、男たちの動きが変わった。

「うおっなんだ、腰が勝手に…と、止まらぬぞ……!!」

ずぶっずぶっずぶずずずずずずぷぅぅぅっ!!
魔王が外法を弄したか。肉穴をほじくる剛直の抽迭は一気に加速し、火を熾さんばかりに苛烈を極める。
「ひゃらそれすごっ…また…きちゃうっ!? 今までのよりずっと凄いのっおっきいのきちゃうぅぅぅっ!!」
一段と逞しさを増した肉楔に前後の淫門を責め立てられて、子宮の底から熱い何かが一気に湧き上がる。
「おお射精すぞっ……俺たちの種で孕んでしまえ!!」
男は口々に限界を叫び、そして示しあわせたように。
ズキュブチュリュグニュリュゥゥ――――ッッ!!
六つの肉穴へと根元まで突き立てられた怒張が、牝肉の奥底目がけておびただしい精をぶちまけた。
びゅるっびゅるっびゅびゅりゅぅぅっっ!!
「はぁぁんっ♥ せぇぇきぃ熱ひぃぃいんっ!! わたくしもォイクッ、イッちゃいますぅぅぅっっ!!」
まず果てたのは精液狂いの堕落巫女であった。子宮と直腸に灼熱の迸りを浴びつつ極めた白濁姫は、背骨が折れるほど反り返らせた肢体をビクビクと痙攣させる。
ぶしゅっびゅばびゅるびりゅびぶぅぅ――――ッッ!!

「あひぇっチンポ汁イクッ♥　ひっかけられただけでまたイクのッイクイクイクゥウゥゥゥッッッッ!!」

肉穴と同時に身体中へと子種汁をぶちまけられながら、羅紗もまた絶頂し凄まじい金切り声を上げた。

どびゅくっどびゅびゅっどぷどぷどぷぷぅぅっ!!

「きゃひぃぃっイクッ、おまっおまんことお尻両方でイクッふたついっぺんにっひィィぐうぅぅぅッッ♥」

最後まで抗っていた刹那も、前後への同時射精に卑猥な咆哮を上げながら二穴絶頂へと吹き飛ばされる。

「ひぃぃっイッてるっおなかのおくからイッてるぅぅっ…はっ孕んだ…絶対孕んでるッ種付けでイッちゃうのっ…ひゃぅお尻もまたっまたイクぅぅっぅっ♥」

一番我慢していた分だけ、刹那の絶頂快楽は一際激しかった。受精の疼きに震える子宮を新たな射精に穿たれて、峻悦に腰骨が砕け散る。

子種をたらふく呑まされパンパンに膨れた直腸は更なる精を注がれ弾け、結合部からブビュビリィィッ!!　と泡立った牡粘液を四方へと噴いた。排泄の開放感に身体中が弛緩し、直腸が甘く蕩けきる。

全身が陰核同様の快楽中枢に造り替えられたかのようだ。精を浴びる毛穴の一つ一つまでもが絶頂を紡ぎ、喜悦が泥水のように意識を呑み込む。牡汁の凄まじい臭いが嗅覚を潰

し、粘つく白濁に視界が塞がれた。
　淫声の三重奏が夜空をつんざき、白濁にまみれた牝将の肢体がわななく。その恥声には貞淑さの欠片もない。激しい放精は肉の内側から女たちの理性と矜持を淫獄の業火で完膚なきまでに焼き払っていた。
「もっと苛めてぇっ…いくらでもご奉仕しますからっ…こんなわたくしのこと…もっと蔑んでぇ♥」
「んあぁ…誰でもいいっ…だれだっていいよぉっ……だれかァッ羅紗とおまんこしよっしよおぉぉっ!!」
「はひぃっもぉイけないっ……らめなのぉっ…やらっ、股こすれただけでまたぁっ、ぁっあへぇぇぇ……♥」
　数百の牡による一斉砲撃に、溶解した蝋にも似た白濁液の海に溺れる三匹の牝戦姫。水揚げされた魚みたいに喘ぐその瞳は虚ろで、理性の箍が外れたような薄笑みで闇色の虚空を映していた。

※

「ふん、全ての牡を果てさせたか。ククク、三匹とも見事なまでの浅ましさじゃったぞ――」
　魔王の言葉に辛うじて反応したのは刹那だけだ。大きな絶頂を迎えほんの少し自分を取り戻した少女は、黒い瞳で必死に禍虞夜へとすがる。

快楽に溺れきり、堕落しきってなお。彼女は魔王の言葉を――家臣の命を助けてやるという恩赦の言葉を待っていた。家臣を救うという使命感だけが、搾り滓のような理性を繋ぎ留めていた。

「ん――ああ、恩赦であったな。しかしお主ら畜生に優劣などつけようもあるまい。されば――」

隻眼が邪悪に嗤った。その手が翳されるや、処刑場の隅に束ねられていた槍が一斉に空へ躍る。その数五千。それは空を舞う燕のように中空で一回転し――。

ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザ!!

豪雨のように地上へと降り注いで、処刑場に集う兵士らを一人残らず刺し貫いた。おびただしい血飛沫が噴き上がり、夜空を真紅に染め変えてゆく。

「皆仲良く黄泉へと下るがよいわ。お主らはその姿のまま国許へと送り届けてやるぞ……ククハハハッ!!」

それはほんの瞬きの間であった。男たちは一人残らず、悲鳴さえ上げることなく死の眠りへと落とされる。

「あ…こ、殺さ……わた…し……こんな頑張ったのに…死んじゃった…みんな…あはっ、あはは…はははははははははは……!!」

余りにも呆気ない幕切れ。一瞬の虐殺を前に、姫将を繋ぎ留めていた最後の糸がぷつりと途切れた。焦点の合わない壊れた笑顔で、ひたすら乾いた笑い声を上げ続ける。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/